

☆待降節第4主日(12月18日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

### 第一朗読 (イザヤの預言 7章 10-14節)

主は更にアハズに向かって言われた。  
「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。  
深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」  
しかし、アハズは言った。  
「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」  
イザヤは言った。  
「ダビデの家よ聞け。あなたたちは人間に  
もどかしい思いをさせるだけでは足りず  
わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。  
それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。  
見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み  
その名をインマヌエルと呼ぶ。

### 第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 1章 1-7節)

キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、  
召されて使徒となったパウロから、— この福音は、神が既に聖書の中で  
預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。  
御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、  
死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。  
この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。  
わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による  
従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、  
イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。—  
神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの  
父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるよう  
に。

## 福音朗読（マタイ 1 章 18-24 節）

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れた。

## 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

いよいよ待降節も第四主日を迎えました。最近は急に冷え込んできましたね。一日の日の長さが一番短い頃になります。北国では雪も積もり始めているようです。雪の被害が出ないでほしいですね。

さて、今日の主日の聖書朗読は救い主がこの世界に与えられ、それはダビデ家の血筋から生まれるということが強調されています。このことはイスラエルの民が大事にしてきた旧約聖書の中に預言者たちによって告げられ約束されていたことでした。神は約束の神であり、ご自分の約束を守られる神です。横暴な神ではなく、民をそして全人類を救う神なのです。

## 第一朗読（イザヤの預言 7 章 10-14 節）

イザヤは紀元前 7 世紀ごろの預言者で、このイザヤ書でははっきりと「しるしが与えられる」と予言しています。イスラエルの民のかたくなさに気をもみな

から主なる神は「見よ、乙女が身ごもって、男の子を生み、その名をインマヌエルとよぶ」と語られます。インマヌエル、それは私たちとともにおられる神を指しています。壮大な宇宙万物を造られた神がこのちっぽけな地球の又最も小さな私と共におられるのです。なぜ神はこの人間にこんなにも寄り添いたいののでしょうか。考えれば考えるほど不思議です。

## 第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 1章 1-7 節）

この手紙でパウロは聖書の預言がイエスにおいて成就したとはっきり述べています。パウロは「この福音は…御子に関するもので、御子は肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中から復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、私たちの主イエス・キリストです」と述べています。パウロは生粋のユダヤ人、生粋のファリサイ人でしたから聖書のことをだれよりも知っていましたので、イエス・キリストにおいて救い主の預言がイエスにおいて成就したと確信したのです。そして彼は異邦人にもこの素晴らしい福音を伝えるべく奔走していると語っています。このパウロの力強い信仰を私たちも見習うようにしましょう。

## 福音朗読（マタイ 1章 18-24 節）

マタイは福音の書き出しにイエス・キリストの系図を書き、イエス・キリストこそ(旧約)聖書で預言されている救い主であることを強調しています。そしてイエスはダビデ王の末裔であるヨセフの子として誕生した次第を書き表わしているのです。特に今日読まれている場面はヨセフにとって考えてもみなかったことで、ヨセフの当惑ぶりが書かれています。当時としても現代においても当惑すること当然の出来事ですが、ヨセフは神の使いの言葉を信じて、マリアの立場を理解し、マリアを妻として迎えるのです。神の使いの言葉を信じることは自分にとっての近い人を信じることに繋がります。マリアを妻として迎えたヨセフは幾多の困難を乗り越えて幼子イエスとマリアを守り抜きました。形ばかりの夫婦ではなく苦楽を共にした聖なる夫婦となったのです。イエスは

この夫婦を通して人間の現実を理解し、神の慈しみをその力とされたのです。イエスの説かれた福音の中にはマリアとヨセフから学んだ多くの真理がちりばめられています。良い夫婦は神の愛に満たされ、神の愛を語るのです。



足立教会の馬小屋

P.S.

降誕祭のミサは 12 月 24 日(土)夜 8 時からあります。洗礼式もあります。  
12 月 25 日(日)は 10 時からのミサになります。ミサの始まる少し前に  
来るようにしましょう。

カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光